

16

中島家にある「解体新書」と その書き込みからわかること

板野 俊文¹⁾, 中島 洋一²⁾

¹⁾香川大学, ²⁾中島病院

中島家には現在二種類の『解体新書』が残されている。黄土色表紙の五巻揃いのものと、黄色表紙の三巻のみのものである。この中で書き込みのあるものがあり、その書き込みより、いつごろ、どのように使われたかを知ることが出来る。今回の発表ではこれを解き明かし、当時の京都における医学修行についても明らかにする。

(1) 中島友玄の京都遊学

中島家四代目の友玄は文化五年(1808)、中島宗仙(安永三年(1774)～天保十一年(1840))の長男として岡山県邑久郡に生まれた。友玄は天保四年(1833)二十五歳の時に京都に遊学し、吉益、緒方、小石、岡田、藤林等に入門し、医学を学んだ。この間の日記として書かれ、残されているのが『京遊備忘』で天保四年正月二十六日より九月五日までが、記されている。

(2) 解体新書に関する由来や関連書籍

三月五日に小石会(小石元瑞の究理堂)に入門したがその旨を父に連絡した。また小石会では解体新書と医範提綱が使われていたので、送ってくれるように手紙を書いた。

(3) 解体新書の書き込みを判読し、それが何に由来するかを解く。

書き込みがあるのは巻の1の最初の部分である。表紙の裏に書かれているのは巻の一から四までの臓器の名称が書かれた目次である。次に一枚の紙がはさまれている。「男子解体運刀法 大矢尚齋著」と書かれており、当時の解剖方法が書かれている。

巻の一タイトルの部分に「解体」の横に「アナトミア」とある。また2葉目の上段に書き込みがあり「重訂増訳に曰く」とある。他の書き込みからも参照して、重訂解体新書による記載を元に書き込まれたことがわかる。

(4) 小石会での学修

小石会での学修の方法が、友玄が受けた講義より十年後の日記に残されている。

筆者は内山謙吾で「究理堂の資料と解説」の中に「在塾日記」として読むことが出来る。

弘化二年(1845)四月二十日に始まり同年十二月二十九日までの日記である。

謙吾が最もよく勉強したのは「医範提綱」で、次に出てくるのが「泰西熱病論」である。それ以外のものとしては「気海観論」「内科撰要」「方府」「産論」と続く。

問題の「解体新書」であるが、これは少し変わった使われ方をしている。11月9日に突然出てくる。その後、頻繁に読まれる。これに呼応する記載がある。10月26日、27日に刑死者の解剖がある。29日は犬の解剖、11月6日はサル(イヌ)の解剖、12月1日は雌サルの解剖、18日はイノシシの解剖である。これから判るのは、おそらく解剖実習書として「解体新書」を用いたのではないかと理解した。なお、中島家の文書の中にも豚の解剖図がある。

(5) まとめ

現代流にいうと基礎医学の勉強や講義は「医範提綱」で行い、解剖実習では「解体新書」を用い、臨床医学では「泰西熱病論」「内科撰要」、臨床薬理学として「方府」を用いた。中島友玄もこのような教科書の使い方をしたと思われる。